

2022年度 入学試験問題

国 語

(第2回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(問題の都合で本文を省略した箇所があります。)

① 子どもたちの遊びの質が変化している。道で遊んでいる子どもを見ることが少なくなり、見かけてもゲームをしている、というような インシヨウ^aを持つ人も少なくないだろう。大人は、誰もが自分が子どもの時の方がよく遊んだと言うが、もしその通りなら、時代が進むにつれて、子どもたちはますます遊ばなくなることになる。遊ばない子どもがいるとしたらどうなるのだろうか。動物の子はじゃれ遊び、それが後に餌を取ったりする生きる術の基本につながる。では人間の場合はどうか? コンピュータを前にデスクワークによって生活の糧を得ている人間社会ならば、子どもの遊びも室内でゲームをするのは必然ではないか、という意見もあるかも知れない。だが人間の社会が成り立っているのはコンピュータだけではないことは自明の理である。コンピュータは応用であり、人間が生きる基本ではない。

b 人間は自然の環境との関係のバランスの上に成り立っているという感覚は、今日の環境問題がシンコク^bになっていく状況では、子どもたちに伝えるべき人類の永続性のために優先される課題である。そして人と人との関係のコミュニケーションも「人間」という言葉のように人間社会の基本である。この自然や人との関係を子どもは幼少の頃から遊びの中で自ら身につけてゆく。それは動物の持つ本能とでもいえるべきものである。しかしながら人間は与えられた環境への適応力も高いので、それらを欠く環境下でも十分に生きていくことができるかの ように錯覚してしま¹う。人類が自ら生み出した文明によって滅んでゆくという予言が的中するとしたら、³ そういう錯覚によるものかも知れない。人類が生み出した文明の影響は、見えない所で次代を担う子どもたちに及んでいる。それゆえに大人は子どもたちが成育する環境に気を配る。セキニン^cがあるのである。それが持続可能性につながる。

人間の創造力、問題解決能力、社会形成能力といった持続可能な人間社会の形成が脅かされるとしたら、そのような人間の成長、発達に異常がきたしてからであろう。子どもの遊びは人間の成長、つまり子どもの心身の全面発達に必要な基本である。ゲームの遊びが悪いというのではなく、ゲーム以外にも人類の生存に基本的な体験を含めて多様な遊びの体験をすることで子どもの全面発達が保障される。そのための環境を子どもたちにどうつくっていくかが、大人が次世代に負うセキニンである。

遊びの環境となると、実際にここで述べるように、子どもたちの遊びは家の中など室内化している。そして外の遊びというと、拠点は学校となり、道路での遊びは極端に減っている。道での遊びが減っているということは地域社会との関わりが失われているということであり、その影響の大きさは将来に近隣関係はじめ、地域社会の形成が問題となった時にやっとなることが

になるであろう。

唯一、学校帰りの通学路が子どもが集団で地域の環境に関わることができる日常的時間帯である。しかし事故や犯罪の危険性から足早に、早く家に帰るように指導されているのが普通である。よって子どもたちが学校からの帰りに沿道で遊ぶというようなことは奨励されないし、そのために物理的環境として道路を遊びやすくするなどということも考えられない。そこに、子どもたちが交通事故や犯罪に遭う恐れのある道路の物理的環境を変えようという発想などは微塵だに出てはこない。

(中略)

「道草」とはよく言ったもので、道端の草花に目をとられてというように、ゆっくりした速度、立ち止まり、遊び、考えるといった、何でも早い勝ちといった今の時代に警鐘をならす言葉の力を持っている。単にそれだけではなく、子どももの成長の面でもたいへん大事なことである。「道草を喰う」をマイナスに捉えるのではなく、人間の成長、そして④社会の健全な機能へのポジティブな要素と捉えて見直すことが今、求められている。

「都市とは、その通りを歩いている一人の少年が、彼がいつの日かなりたいと思うものを感じ取れる場所ではなくてはならない」とは20世紀の著名な都市計画家であるルイス・カーンの言葉である。ルイス・カーンのような哲学的な建物で道草するのもそういう感じを得るかも知れないが、道草して自然の生態や、友達と技を競ったり、そしてまた沿道の店や職人さんの仕事に触れたりというのも、将来、何になるかを感じるといふことかもしれない。

しかし、今は皆、足早に通りを過ぎるように、道路や都市計画の制度や事業でモウけられる公開的空地も通行のためが第一とされている。人々が滞留する場に公共空間が用意されていないことはベンチの少なさや、居心地の悪いベンチを見ればよくわかる。

以下は最近子どもに聞いた話である。Sさんは小学6年生。大の生き物好きで、お母さんに内緒でつかまえてきたオタマジャクシを押し入れで飼っていたほどである。そのSさんは学校の帰りは登校時と違う道を帰る。ちよつと遠回りだけど、商店街の方を通ってくる。それにはいろいろ理由があるようだが、人気のない住宅地の中を通ってくるより、安心できるようだ。そして商店の店先のものを眺めてくるのも楽しい。

そしていつもの決まりは魚屋さんの前の水をはったバケツの中の生きたドジョウがグチャグチャ動き回るのを見ることだった。それも下校時の楽しみだった。あまりにもずつとドジョウを眺めているので魚屋さんと顔なじみとなり、「今日は学校はどうだった？」などと聞かれて話をするようになった。そしてついには、そこでもドジョウを見ているので、「持ってゆくか？」と分けてもらった。それ以外にも時々、お刺身を一口味見させてもらったりというほどの仲になった。この魚屋さんとの関係は親も知らなかった。お母さんもある時、子ども連れで魚屋さんに行った時に、すでにわが子が顔なじみになっているので驚いたという。

子どもはこのように道草から家族以外の地域の人とのコミュニケーションを発達させ、自己の

社会を広げてゆく。それは自分を認知してく
れる人が家族以外にいるという、存在感にもつ
ながる。その地域の人たちがまるで小説かドラ
マ、漫画に出てくるような面白いオジサン、オ
バサンであったならば、それは子どもの社会性
や情緒の発達に大きな栄養となるう。

もちろん、道草の言葉のように、道に接し
ている自然環境からも子どもたちは多くのこ
とを学ぶ。学生が登下校時の子どもの行動を
調査した事例によると、道沿いに自然が豊か
な通学路と、まったく自然の環境がないところ
との違いが明確になった。当然、自然が豊かな
通学路の方が子どもたちはかかる時間が長く、
自然との接触も多いし、自然への関心が高いと
いう結果になった。

子どもたちの遊びも社会の変化を映すよう
に、道路を遊ぶ場として、いわば道路で子ど
もが主役となる時代は、幕を引いたかのようである。図は、筆者（木下）が以前に共同研究者と
行った※三世代遊び場マップ調査の25年後に、四世代目の遊び場マップづくりを行っている世田
谷区太子堂・三宿周辺地区での遊び場の変化を示したものである。調査方法に違いがあるものの、
遊び場として

その25年前に調査した時は、三世代遊び場マップ調査で子どもに話を聞くのは楽であった。通
りで遊んでいる子をつかまえて拠点の小屋に連れてきて、一人あたり1時間〜2時間の話を聞
く。子どもは恰好の秘密基地か、たまり場を見つけたかのように、その小屋に毎日来て、そこは
ミニ児童館のようになった。子どもたちは捨て猫を拾ってきて猫のたまり場にもなった。そんな
時代にも、すでに子どもの遊び環境は、三世代間の変化から問題として捉えられていたが、現在
はさらに悪化の一途をたどっている。

▼25年前、当時の調査において、子どもは猫のようだと話題になった。子どもたちへのヒアリン
グで抜け道、秘密の道などの話が出る。表の道を歩くのではなく、家の裏のブロック塀を渡った
り、アパートの裏など、自分たちで通り抜ける道を発見し、秘密の道にする。抜け道と言いな
ら正規の公道を歩くより時間が実際はかかるのだが、それは子どもの論理にはない。そんな実態
調査の結果から我々が結論に導いたのは子どもが猫ならば、大人は犬だと。犬はちゃんと公道を
通り、家の裏のブロック塀渡りなどしないからである。そんな子どもたちのヒアリング調査から、
子どもが街を大人以上に使いこなしてよく知っていることを我々は学んだ。四世代目の今はどう

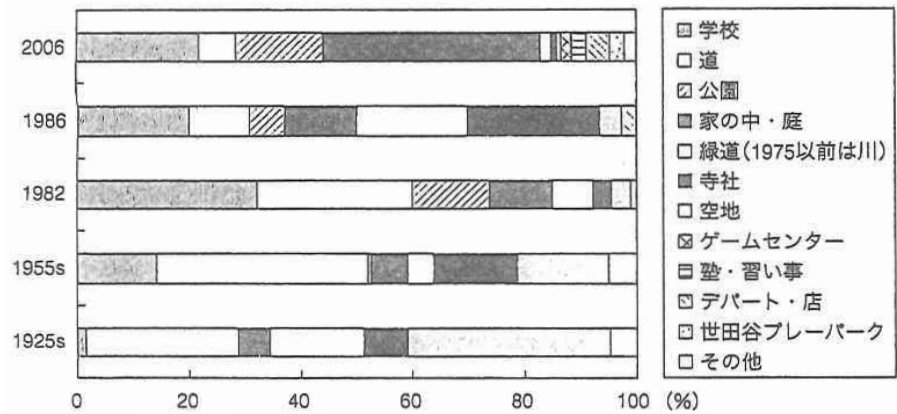


図 三世代から四世代への遊び場の移り変わり
(注：1925s=1925年前後、1955s=1955年前後に遊び盛りだった各世
代20人ずつへの聞き取り調査による。1982：T小2・4・6年生計
237名へのアンケート調査、1986：同計203名へのアンケート調査、
2006：T M2 小学校1～6年生計478名へのアンケート調査)

であろうか。少なくとも表の道から子どもたちは姿を消した。しかし抜け道や秘密の道はどうであろうか。

そんな探検や冒険をする子どもたちの集団関係が薄れている。そして塾や習いごと、スポーツクラブに多くの時間をとられている。これらは子どもたちの子どもらしい遊びや行動が見られなくなっている要因である。道路は子どもの仲間のつきあいと探索行動を発展させていくという自然なモデルは、C・アレグザンダーやアンネ・マリー・ポロウィーらにより、まちづくりの提案においても古くから指摘されていることである。またジェーン・ジェイコブスは、子どもの社会化の場所として、道が公園よりも優れていることを力説した。『子どものための都市』を著したバートレットは次のように言う。

「近隣地域が子どもらを安全で大きな世界へ招き入れる時、子どもらは複雑さに満ちた都市に出会うよりも前に徐々に試しながら自分の能力を磨くことができる」

子猫が巣から徐々に自分のテリトリーを拡げていくように、住戸まわりの道は、子どもが遊びながら自分の力を試し成長していく場でなければならない。

(木下 勇「子どもの遊びの質の変化」より)

※三世代…：図中の1925sが第一世代。1955sが第二世代。1982と1986が三世代の事を指す。

問1 —— 線 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 —— 線 I 「ように」と意味、用法が同じものを含む文を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 母から5時に帰ってくるように言われている。
- 2 練習の結果、さか上がりができるようになった。
- 3 鉄のような決意を胸に今回のテストにのぞむ。
- 4 とうがらしのようない食べ物に苦手だ。

問3 ——線①「子どもたちの遊びの質が変化している」とありますが、昔と比べ変化した今の子どもたちの遊びの特徴とはどのようなものですか。次からふさわしいものをすべて選び、番号で答えなさい。

- 1 室内でゲームをする。
- 2 学校帰りの通学路で遊ぶ。
- 3 道端の草花に立ち止まり考え込む。
- 4 外遊びの拠点を学校にしている。
- 5 家の裏のブロック塀渡りをする。
- 6 秘密基地やたまり場を見つけて集まる。

問4 ——線②「遊ばない子どもがいるとしたらどうなるのだろうか」とありますが、筆者はこのことに対してどのように考えていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 子どものために環境を整えるという考えを持つ人がいなくなる。
- 2 心身の発達が遅れ仕事をするための体力がつかなくなる。
- 3 自然や他者との関わりを身に付けることができなくなる。
- 4 コンピュータ関連以外の仕事に就こうとする人がいなくなる。

問5 ——線③「そういう錯覚」とありますが、これはどのようなものですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人間は今や自然を支配することができ、思うがままに環境を変えられるという錯覚。
- 2 人間はインターネットの中でのみ人間関係を築ければ十分に仕事ができるという錯覚。
- 3 人間は自然や他者との関係が希薄であつても十分に生きていけるといふ錯覚。
- 4 人間は幼年期によく外遊びをしていればバランスのとれた大人になれるという錯覚。

問6 ——線④「社会の健全な機能へのポジティブな要素」とありますが、「道草を喰う」ことをポジティブに捉えている筆者の考えとして、ふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自然の生態を知り関心を高めることができる点。
- 2 建ち並ぶ建造物を見て哲学的な感想を持つ点。
- 3 仲間と共に探検することで集団関係を築ける点。
- 4 家族以外の大人とのコミュニケーションがとれる点。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

河野日向子は再来年に廃校となる愛媛県立越智高校五木分校の三年生で、夏の※俳句甲子園出場を目指し、同級生の小市航太らとメンバー集めに奔走している。そんななか、一年下の齋和彦が推薦する来島京をメンバーに入れようと説得するがきつぱりと断られる。だが、日向子はあきらめることなく再度説得を試みる。

翌日の放課後。文芸部の部室には四人が集まった。

航太と河野女史。机を挟んで来島京、その横には齋和彦もいた。

「すみません。おれも、結末まで見せてもらってもいいですか。面白そうなんです」

「どうぞどうぞ。おれもやじうまだから」

航太は気軽に答えてから、あわててつけ足した。「あ、来島さんがそれでいいんなら」

来島京は、硬い顔のまま無言でうなづく。

河野女史が二枚の紙を取り出して、裏向きのまま机に並べた。

「本当は手書きのほうがいいのかもしれないけど、私、字が下手なので。悪筆を見せたらかえって来島さんの歌のよさが損なわれそうなので、ワープロ打ちしてプリントアウトしてきた」

河野女史はそう言うのと、まず一枚を表に返して、来島京の前に滑らせた。

迷ふ日々涙して立ちすくむ日々

すべて愛しき日々年終はる

「来島さん、この歌で間違いない？」

来島京は、またうなずいた。

「昨日も言ったけど、この歌を選ばせてもらったのは、私が、すごく好きだから。迷うことも泣くことも立ちすくんで動けなくなること、みんな無駄じゃない、そういう日々ばかりだったけど、それでもその一年がいとおいしい。なんだか、この歌を読んで涙が出そうになったよ。それで……」

①「早くしてもらっていいですか」

河野女史の熱弁を、来島京は表情のない声でそうさえぎった。

「あ、ごめん。この期に及んで、能書きばかり言っちゃいけないかった」

河野女史は、もう一枚の紙に手をかけると、大きく一呼吸して、それからさっと表向きにした。

真っ白な紙に、たった一行。

意味をわかろうと意識するまでもなく、すべての文字が航太の目に飛び込んでくる。

迷ふ泣く立ちすくむまた日記買ふ

その文字が耳の中で響く。二回三回、こだまする。

「来島さん。私、短歌と俳句で同じ心を詠むことができるかと昨日言った。でもそれは、ただ言葉を縮めることじゃない。来島さんの歌、自分が悩んでもがいていた時間を本当に大事に思っている。その思いを噛みしめていることが、『日々』という言葉を繰り返すことで伝わってくる。でも、そういうリフレインは、俳句ではあんまり使えない。なんと言っても、俳句は短いから」
「だつたら……」

思わずというふうに来島京が言いかけて、それからやめた。河野女史があとを引き取った。

「だつたら、やっぱり俳句は短歌の代わりにはなれないんじゃないかって？」

「そ、そうです」

河野女史は大きくうなずいた。

「そう。厳密に言ったら、そうかもしれない。だからね、この言葉を使った」

「あ！『日記』？」

航太はそこで思わず叫んでしまい、他の三人の視線を浴びて体を縮めた。

「悪い、つい……」

「ううん、そういうことなんだ、小市」

Ⅱ 河野女史の声が熱を帯びてきた。

「それから、『愛しき』という言葉。悩んだ日々も動けない日々も、愛しい。その気持ちはよくわかるけど、でも俳句では、『愛しい』とか、そういう感情を直接出す言葉はあまり使わない。だからと言ってそういう思いを詠めないわけではない。日々がいとおいしい、そう歌う代わりに、その思いは日記を書くという行為に込めることができる①と考える」

航太の脳裏に、買い込んだばかりのかわいらしい日記帳を抱きしめて毅然と歩く河野女史の姿が、浮かんだ。

「日記を書くのは、自分の過去を大切にすること。愛しく思うこと。たとえそれが楽しいだけの毎日じゃなくても、つらいと泣いた日々でも。きっとこれからだってそういう日々は続く、でもそれも全部自分のものだとして受け止めよう。そのために、私はまた日記を買う。それが俳句の表し方。短歌の技法とは違う。でも、俳句で自分の感情や思いを表せない②ということは、絶対にない」

来島京の反応を窺った航太は、あわてた。彼女の目が赤いのだ。

「だ、大丈夫？」

来島京は顔をそむける。航太は彼女が目をこするのを見ないようにした。一方、のほほんとした姿勢をくずさない男が一人いる。

「あのお、ちよつと質問いいですか？」 河野先輩

「はい、斎君、何？」

「河野先輩の説明、すごく面白かったんだけど、ちよつと気になったんです。俳句って、基本、季語を入れなければいけないんですよね？」

航太は内心あつと叫んだ。そうだ、すっかり忘れていたが、その通りだ。昨日恵一も言っていないじゃないか。

「来島さんの歌は最後の『年終はる』で、一年を振り返っての感慨だということを表してますよね？ そんなところも触れられてない気がするんだけど、いいんですか？」

「そうよね。そこはちよつと苦心した。実は、※さいじき歳時記を結構ひっくり返して調べたんだ」

「歳時記なんて持つてるんだ、河野女史」

航太が口を挟むと、A たしなめられた。

「当たり前。昨日もこの部屋を出たあと、すぐにお世話になった」

「ああ、昨日見ていた辞書みたいなもの、あれ、歳時記なんだ」

「小市と話していると脱力するよ。だつりよく私たちが、五木中学校卒業の時に、全員卒業記念品として学校からもらったでしょ。斎君たちもそうだったんじゃない？」

河野女史がそう言って二年生二人の顔を交互に見ると、斎和彦が穏やかに答えた。

③「そうでしたかね……。ところで河野先輩、さっきの僕の質問ですけど」

三人の目がまた自分に集まったのを見て、河野女史は改めて説明を再開した。

「実は、『日記買ふ』が季語」

Ⅲ「へ？」

叫んだのは、多分男二人だ。

「季語って草や花の名前とか、自然のものじゃないのか？」

「いや、入学式とかクリスマスとかも季語だったはずですよ」

言い合う横で、河野女史が、B 我が意を得たりという顔でにっこりする。

「そう。それで、日記を買うのは、普通……」

男二人の呆然とした声が、またさそう。

Ⅰ「か！」

すごい。航太は今度こそ感激した。

日記買ふ。

たったその五音に、自分の過去、これからの未来、どっちも受け入れる思いと、年の瀬の空気が新しい年への期待、それをみんな突っ込むのか。

さっきの、日記を買い込んだ河野女史の姿が、今度は首にマフラーを巻き付けている。去年見た、ピンクのチェック。あ、コートも着ている。ベージュのダッフルコート。弾んだ足取りで店を出た河野女史の柔らかい髪が、そのフードの上で揺れている。傾いた冬の日、風は冷たさうだ。来年はどんなことがあるだろう……。

そこで航太は我に返った。

——やばい、ここまで勝手に想像をふくらませたら、完全に妄想じゃないか。

航太に自分の姿をありありと映像化されていたのも知らず、河野女史は来島京しか見ていない。

「どう？ 来島さん。俳句をやってみてくれなかな？」

赤い目のままで、来島京がうなずいた。即座に、河野女史がその肩をぽんとたたく。

「じゃ、あとで俳句甲子園の説明プリント、持ってくるからね」

「はい」

顔を上げた来島京は、表情がやわらかくなっていた気がした。

IV
——ふうん。

航太は感心する。

——河野女史、結構リーダーシップがあるのかもしれない。

ヤマアラシみたいにⅡ むき出したった女の子を、懐柔できたのだから。

そして、俳句甲子園のメンバーを、一人確保できたわけだ。

二人が来島京を文芸部室に残して歩き出すと、斎和彦もついてきたが、やがて、こう口を開いた。

「驚きました」

河野女史が、手にしたノートを広げながら尋ねる。

「驚いたって、斎君、何に？」

「彼女、俳句甲子園に行くと言い出すとは思わなかったんです」

航太は驚いて斎和彦を見る。

「え？ お前が彼女を推薦したんだぞ？」

「まあ、そうなんです……」

足を止めた河野女史も、斎和彦をじっと見つめる。

「斎君、何かわけがあるの？」

「ええと、このくらいは言ってもいいかな。彼女、五木中学出身じゃないんです」

「あ、そうなんだ」

相槌をうったのは航太、河野女史はほかにも何か思いついたようだ。

「だからさつき、斎君は言葉を濁したの？ ほら、卒業記念品の歳時記のことを話していた時」

「ああ、そうです。ぼくは先輩たちと同じ歳時記をもらってるけど、彼女の中学はどうだったか知らないから」

「ちよつと待てよ。五木中学出身じゃないってことは、彼女……」

「ええ。この島に来たのは高校入学の時。ま、ぼくの家は家業が家業だからそこそ家庭の事情がわかっちゃいますけど、彼女は今、親と離れて暮らしています。この島にいるのは昔からうちの氏子のおじいちゃん、彼女だけ」

「はあ……」

どこの家だって、それなりに家庭の事情はあるんだな。実は、航太の家も、母親がいない。その暮らしに悲愴がつてもないけど、表面だけ見る人間は変に気を回しすぎるかもしれない。

河野女史がまた質問した。

「聞いてもいいのかな？ 彼女の親はどこに住んでるの？」

「松山市らしいです」

「あ……」

④ 三年生二人は顔を見合わせた。

わざわざ辺鄙な島の廃校寸前の分校に、「俳都」と自らを誇らしげに名乗る街から、海を渡ってやってきた女の子。

なんだか、触れてはいけない事情がありそうだ。

「でも、ま、そんなに深く考えることはないのかもしれませんが。高校受験にちよつと失敗して、定員に空きがあるのは五木分校だけだったとかね」

斎和彦は軽い調子でそう言うが、河野女史はその顔をまだ見つめている。

「なんです？ 先輩」

「ひよつとして斎君、そもそも来島京の反応を見たくて、私をたきつけた？ 彼女の名を持ちだした？」

斎和彦はⅢだ。

「ええと、そんな深いたくらみはないですよ。ただ、俳句甲子園なんて松山に関連したワードが出た時、彼女がどんな反応をするのか、見たかったのもちよつとはあります」

「こら」

航太が怒ってみせると、斎和彦は笑った。

(森谷明子 『南風吹く』より)

※俳句甲子園……愛媛県松山市で毎年8月に開催される、高校生を対象にした俳句コンクール

「全国高校俳句選手権大会」。

※歳時記……俳諧・俳句の季語を集めて分類し、季語ごとに解説と例句を加えた書物のこと。

問1 — 線A「たしなめられた」、B「我が意を得たり」、C「懐柔」、D「たきつけた」の意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

A「たしなめられた」

- 1 見当違いの意見をばかにされた
- 2 自分勝手な言葉を否定された
- 3 偏見へんけん的な思い込みを非難された
- 4 常識外れの発言をしかられた

B「我が意を得たり」

- 1 自分の思う通りだ
- 2 人をうまく利用できた
- 3 人から賞賛された
- 4 自分が得をした

C「懐柔」

- 1 黙だまって従うように威圧いあつすること
- 2 優しく接して油断させること
- 3 うまく手なずけて考えに従わせること
- 4 励はげまし奮い立たせること

D「たきつけた」

- 1 うそぶいてはぐらかした
- 2 そのかしてせかした
- 3 その気にさせてけしかけた
- 4 言いくるめて利用した

問2 — 線①「早くしてもらっていいですか」とありますが、この時の「来島京」の心情として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自分の短歌を持ち出してまでメンバーに誘さそう河野女史の姑息こそくさに対する呆れあきと、短歌と同じ思いを俳句で詠むことなどできるわけがないという自信。

2 短歌に込めた思いを俳句でも詠めるといった河野女史に対する反感と、自分のことを知りもせずさも分かったように短歌をほめる河野女史に対する軽蔑けいべつ。

3 いかにも自信ありげに短歌に込めた思いを俳句に詠めるという河野女史に対する嫌悪けんおと、肝心かんじんの俳句をすぐに提示しない河野女史に対する批難。

4 どれほど自分の短歌を褒められてもそもそもメンバーになるつもりはないという反発と、時間を無駄に使われていることへのいらだち。

問3 ——線②「彼女の目が赤い」とありますが、この時の来島京について説明したものと最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 河野女史の言葉によって、これまで自分が俳句に対して持っていた誤った認識に気づかされ、涙がにじんだ。

2 作品に込めた思いを熱く語る河野女史の姿に、ずっと心の中に秘めていたものが押さえられず、涙がにじんだ。

3 俳句の良さをいかに熱く語ろうとも、しよせん河野女史には自分の気持ちは理解されな
いのだと思ひ、涙がにじんだ。

4 必死に自分を説得しようとする河野女史と、その傍で彼女に協力する航太たちの仲間意識の強さに触れ、涙がにじんだ。

問4 ——線③「そうでしたかね……。」とありますが、「斎和彦」が「河野女史」の問いかけに
敢えて断言を避けた理由を述べた次の文章の「 」に当てはまる語句を文中から十字で
ぬき出しなさい。

斎和彦は来島京が「 」ことを知っていたから。

問5 空らん I · II · III に入る語として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、
それぞれ番号で答えなさい。

<input type="checkbox"/> I	…… 1	新学期	2	月末	3	新年	4	年末
<input type="checkbox"/> II	…… 1	羞恥心	2	虚栄心	3	警戒心	4	無関心
<input type="checkbox"/> III	…… 1	涼しい顔	2	大きい顔	3	知らん顔	4	したり顔

問6 ——線④「三年生二人は顔を見合わせた」とありますが、この時の二人の思いを説明した
ものとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 来島京が以前は松山というにぎやかな街に住んでいたことを知って、現在の辺鄙な田舎
暮らしが嫌になつてゐるのだろうと推測している。

2 来島京が松山という俳句にゆかりの深い街に住んでいたにも関わらず俳句を嫌うのは、
何かしら理由があるのかもしれないと考えている。

3 来島京がもともと五木の生まれでなかったことがわかって、歳時記も見ることがないに
違いないと、俳句を嫌う理由に思い当たっている。

4 来島京がこの学校に来たのには何か事情があることがわかって、自分たちがなんとか力
になつてあげたいという意識がめばえ始めている。

問7 この文章の表現に関する説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 ……線Ⅰ「だったら……」には、来島京が自分の短歌を理解しようとしないう河野日向子に対する不満の気持ちが表されている。

2 ……線Ⅱ「河野女史」には、メンバー集めに必死になり、冷静さを欠いている河野日向子を皮肉る気持ちが表されている。

3 ……線Ⅲ「へ？」は、小市航太と斎和彦とが河野日向子の一方的な説明に圧倒あつたうされていることを表している。

4 ……線Ⅳ「——ふうん。」は、物語の中で語り手的な役割をつとめている小市航太の心中を表している。

問8 この小説に登場する愛媛県松山市にゆかりのある正岡子規の写真を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1



2



3



4



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

言葉は

杉本深由起

言葉は
紙ヒコーキのようなものでしょう

① 一つの言葉に

丁寧ていねいに折り目をつけて

祈いのるような気持で飛ばしたり

② ときには荒あらか々しく

続けざまに投げつけたり

わたしのところ

乗せただけ ひとつも

こぼれ落ちずに届くかしら

まっすぐに

問1 この詩の形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 口語自由詩 2 口語定型詩 3 文語自由詩 4 文語定型詩

問2 この詩に用いられている表現技法の組合せとして、最もふさわしいものを次から一つ

選び、番号で答えなさい。

- 1 隠いん喩・対句 2 隠いん喩・擬人法 3 直ち喩・倒置 4 直ち喩・体言止め

問3 ——線①「一つの言葉に／丁寧に折り目をつけて」からは、どのような思いが読み取

れますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 一語一語を力づくよくはつきりと話したいという思い。
2 目上の人に対して正しい敬語を使いたいという思い。
3 くだらなく話さないで簡潔に表現したいという思い。
4 自分の考えや気持ちをしつかり伝えたいという思い。

問4 ——線②「ときには荒々しく／続けざまに投げつけたり」とありますが、ここから感じられる気持ちとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 緊張 きんちやう 2 困惑 こんわく 3 怒り いか 4 喜び

問5 次にあげるのはこの詩を読んだ先生とA君・B君・C君・D君・E君の話し合いです。詩の内容としてふさわしくないと考えられるものを1～5から二つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

先生 「言葉」があるから自分の思いや考えを別の人に伝えることができるんだね。

1 A君 でも言葉にしすぎるのはよくないんだよね。「こぼれ落ちずに届くかしら」とあるのは、言葉の量が多すぎて、全部きちんと伝わらないということ言ってるんだろね。

2 B君 そうかな。量の問題ではなく、言葉の解釈かいしゃくに関して、発信する側と受け取る側の間にあるずれというか、危うさあやうさのようなものを言いたいのだと思うよ。「紙ヒコーキのようなもの」とも言ってるしね。

3 C君 そうか。「紙ヒコーキ」だから、簡単にしかもたくさん作り出せるけど、目的地にうまく飛んで行けるかわからない。言葉がちゃんと相手に届くかわからない、ということだよ。

4 D君 うん、そうだと思う。だから、この詩では言葉の限界ということを遠回しに表して、言葉に頼りすぎるたよことの危険性を言おうとしているのだと思うな。「沈黙は金ちんもく」なんて言うしね。

5 E君 確かに「言葉」は使い方が難しいかもしれないけど、大きな力や可能性を秘めていて、だからこそ使い方に十分気をつけていく必要がある、ということ言いたいのだと思うな。

4 次の問題に答えなさい。

漢字の成り立ちにはいくつか種類がありますが、主として次のようなものがあげられます。

象形…目に見える物を絵画的・具体的に表す方法。

〈例〉山・川

指事…目には見えない概念などを記号的・抽象的に示す方法。

〈例〉三・上

会意…意味をもった字や部分を複数組み合わせる新しく字を作る方法。

〈例〉手十日||看

形声…意味を表す字や部分と音を表す字や部分を組み合わせる字を作る方法。

〈例〉穴十九||究

問 次の□にある漢字のうち、同じ成り立ちの漢字を組み合わせる熟語を作りなさい。なお、

象形・指事・会意は一つずつ、形声は二つ作ります。同じ漢字をくり返し使うことはありませぬ。

〈例〉象形 ↓ 答 耳目

歌	好	詩	飛	末
閣	行	組	本	友

